

長野県が進める新しい時代の新しい学びと高校改革

[プロフィール]

1958年、長野県生まれ。筑波大学卒業後、東京都・長野県の計4高校で教諭。その後、長野県教委事務局指導主事、軽井沢高校校長、県教委事務局高校教育課長などを経て、上田高校校長。県高校長会長を務めながら、SGH(スーパーグローバルハイスクール)を核とした「パッケージ」としての学校改革に取り組み、2018年3月定年退職。同4月から現職。長野県の学びの改革を中心に高校改革を推進するとともに、全国の各種フォーラム等での講演、各誌への寄稿、SNS等を通じて、新しい学びのあり方を発信。中央教育審議会「新しい時代の高等学校教育の在り方WG」委員、文部科学省「通信制高等学校の質の確保・向上に関する調査研究協力者会議」「地域との協働による高等学校教育改革推進事業・企画評価会議」委員、「全国高校生フォーラム2019」協力者、全国知事会「これからの高等学校教育のあり方研究会」委員、「全国高校生マイプロジェクトアワード」審査員等も務める。



長野県教育委員会事務局 高校改革推進役 内堀 繁利 (うちぼり しげとし)

1 我々はどんな時代や社会を生活しているのか

さほど語られなかったことや現実味のなかったことが、急に注目され、日々の話題になる場面が増えたように思う。「新型コロナウイルス感染症」「地球温暖化」「一国では解決できない問題の増加」「少子超高齢社会」「Society 5.0」「雇用形態の変化」「人生100年時代」等々。徐々に表面化したものもあれば、突然浮上してきたものもある。これ以外にも、「VUCAの時代」「正解が一つでない時代」「誰も経験したことのない社会」といったことも言われる。こういう時代に生きる我々は、「どうしたって、これまでと同じことをやっていたんでは、うまくいかないだろうな、これは」と考えるのではないだろうか。

2 これからの時代・社会では何が大切なのか

その多くが22世紀まで生きるであろう子どもたちが生きていく時代や社会では、一層この傾向が強まってくだろう。ならば、次のような価値観の転換が必要だ。

- ・前例踏襲⇒常識を疑うこと、新しい発想
- ・競争⇒競争+共創
- ・同質の個⇒多様な自立した個+協働
- ・大量の知識のinput・迅速なoutput等PCや機械に近づく努力⇒人間にしかできないことを追求し磨く努力
- ・時代や社会に適応する力⇒時代や社会に適応する力+新しい価値や社会を創造する力等々。

「パソコンの父」と呼ばれたアラン・ケイは「未来を予測する最善の方法は、それを創り出すことだ」と言っている。予想できない未来を嘆いたり不安になったりするのではなく、理想とする未来を自分たちで創り出してしまおう、そうすればそれが我々の未来になる、と言っているのだ。

いまだ日本に多く残る、講義中心で同一年齢・同一教材・同一進度の教育システムは、1809年のプロイセンモデルが起源で、19世紀末にアメリカや日本に伝わったと言われる。従順な兵士や画一的な工場労働者などの育成を目的として始まり、ヨーロッパでもわずか200年余り、日本でも100数十年行われてきたに過ぎない。変わらないものではないし、必要があれば変え

るべきものだ。

人間のすべての活動は、文科省的に言えば「豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会を創ること」、OECDラーニングコンパス(学びの羅針盤)的に言えば「個人と社会のWell-beingの達成」を目的としている。この目的は、一人一人がそのために必要な資質・能力を身に付け、強い意思を持って行動することで実現されると考える。必要な資質・能力とは、学習指導要領的には「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」、学びの羅針盤的には「新たな価値を創造する力」「責任ある行動をとる力」「対立やジレンマに対処する力」だと言える。

もう一つ大事なことがある。今も長野県に脈々と流れる「信州教育」の真髄は、「全人教育」と学習者(子ども)主体の教育、子どもたちが本来持っている主体性や意欲への信頼に基づく教育だと考えている。この流れに沿い、「本当の意味で一人一人を大事にするとはどういうことなのか」と問い続けながら、未来を見据えた学びをいかに構築していくかが、我々教育関係者の課題なのだ。

3 長野県が目指す新しい学びとは

長野県では、『高校改革～夢に挑戦する学び 実施方針』に基づく今般の高校改革を「新たな学び」と「新たな学校づくり」を一体的に推進する機会として捉えている。新たな学びとして大事にしたいのは、

- ①探究的な学び(主体的・対話的で深い学び。いわゆるアクティブ・ラーニング)
- ②個別最適な学び(生徒個々に合った自律的な学び)
- ③校内はもとより地域、日本、海外等、学校内外の多様で異年齢の人たちとの「協働的な学び」
- ④個々の生徒と実感に伴って結び付き、現実社会と一体的となった「リアルな学び」
- ⑤感動や発見にあふれた「ワクワクする学び」

などである。実際には、これらの学びが場面ごとに別々に起きるのではなく、複合的、往還的、並行的に行われるように、授業設計やEdTechの適切な活用など学びの環境を整えていくことが重要だ。そのことで、例

えばコロナ禍により学校の休業といった事態が起きても、自分で学びを継続できる生徒が育つことにつながるし、大学等に進学したり社会に出たりしてからも、前述の目的の達成を追求し続けられる「探究の手法を身に付け、生涯にわたって学び続ける自律的な学習者(アクティブラーナー)」を育成することにつながると思っている。

実現したい「学びの改革が目指す学校の姿」もイメージしながら改革を進めている。

- ・教員主導の「教育」⇒生徒(学習者)主体の「学び」
 - ・学校に閉じた、頭の中の「勉強」⇒現実社会と一体的で、Actionを伴った、市民としての「学び」
 - ・うまくいくこと、競って勝つことを追求⇒チャレンジすること、失敗すること、共に考え創ることを推奨
 - ・Equality(平等)の提供⇒Equity(公正)の提供
 - ・同調圧力によりいることがつらい場所⇒自己開示や対話により学びを深められる、楽しくて行きたい場所
 - ・他者との比較による相対的・偏差値の評価⇒構築した自分軸に基づいて自分の成長が実感できる指標(新設した新しい「学びの指標」)の活用
- といった場に学校がなっていくことを願っている。

4 長野県が目指す新しい学びの具体

最後に、実際に長野県がどんな手法や仕組みによって理想を実現しようとしているか、いくつかの例に触れる。(詳細は県教委HPを参照)

これまでの高校は、入学した学校が提供するカリキュラムだけを履修することを基本としていた。これからは、それとともに、1つの学校の枠を超えた学びの場が欠かせない。その1つが、県内のすべての高校生が所属校の枠を超えて参加できる「プラットフォーム」である。これまで県教委は次のようなものを構築してきた。

- ・2016年 生徒の主体性を育む夏合宿(校長会と共催)
 - ・2018年 県内大学との高大連携プラットフォーム
 - ・2018年 海外留学を支援する信州つばさプロジェクト
 - ・2019年 全国高校生マイプロジェクト長野県大会
- そして、今年度からは次の3つの構築を目指している。
- ・WWL(ワールドワイドラーニング)コンソーシアム
 - ・各地域の企業と連携したSDGs探究プラットフォーム
 - ・三者包括連携協定を締結した県立大・KDDIと協働した高校生起業家クラブ(仮称)

また、オンラインで結んだ他校の授業を受講して単位認定する仕組みや大学の授業を先取りする仕組み(AP)等も研究し、実行に移したいと考えている。

長野県では、すでにすべての高校が課程別に3つの方針(生徒育成方針、教育課程編成実施方針、生徒募集方針)を定め、HPに掲載した。普通科を含め、各校が魅力化・特色化を図りつつ、改革を進めているわけだが、加えて、さらに先進的・先端的な取組を行う学校に他校をリードしてほしいと考えている。国の指定校としては、文部科学省のSSH(スーパーサイエンスハイスクール)に3校、地域との協働による高校教育改革推進事業に4校、上述のWWL事業に、研

究拠点校・共同実施校含め11校、経済産業省の未来の教室事業のモデル自治体として長野県が選定されるとともにモデル校に2校、さらに、県独自のモデル校(実践校)として、スーパー探究校、信州型グローバルハイスクール、国際カリキュラム研究校、高度産業教育推進校、少人数学級研究校、骨太リーダー育成校の6校を指定し、実践研究を進めながら他校への成果の普及を図っている。

ICT環境の整備については、全普通教室への電子黒板と教材提示装置、40台のタブレット、テレビ会議システム、大型プリンタの導入が、今年度、5年計画の5年目を迎え、すべての県立高校で完了する。コロナ禍の中、全教職員と全生徒が1人1アカウントを取得できる環境を整備し、かなりの学校で既に取得済みだ。希望する家庭への端末とモバイルルーターの貸出準備も完了している。今後は、全高校へのGIGAスクールサポーターの派遣をまもなく開始し、全高校全普通教室へのWi-Fi環境と、生徒3人に1台の端末の整備を今年度中に終える予定だ。

各界の著名な外部有識者等を委員とする学習空間デザイン検討委員会から8月に最終報告書が提出された。学校建築を、学習・生活・執務・共創の4つの視点から捉え、建築手法までも含む斬新で包括的な報告書だ。今後は、この報告に沿って、予想困難な時代に、新型コロナウイルス感染症の拡大等どんな状況が生じても対応できる、多様な新しい学びにふさわしい柔軟な学習空間を創っていく。

新しい学校の創出も欠かせない。総合学科、総合技術高校、多部制単位制高校など、新しいタイプの学校の拡大充実を図るとともに、通信制の改革にも着手し、この4月には、通信制の望月サテライトを開校した。これまで通信制といえば、教科書を自学自習し、週1回程度通学、紙ベースの課題を提出し、試験を受け、単位認定を受けるというのが通例であっただろう。望月サテライトでは、希望により毎日登校も可とし、EdTech活用により学びの個別最適化・課題や学習履歴のデジタル化を図る。また、現在40超の個人・団体が登録している地域連携協力隊等の協力を得て、個々の生徒の状況を勘案しながら、通信制が比較的弱いとされてきた人とのつながりや探究活動へとつなげる。地域連携協働室、オアシスルーム、クリエイティブラボも設置。特にクリエイティブラボは、3Dプリンタ、映像編集ソフトの入ったPC、撮影も可能なドローン等を置き、個々のアイディアや探究成果をカタチにする、リアルな学び、ワクワクする学びを追求する。

いつの時代も、先代から受け継いだものをより良くして次代に引き継ぐことが大人の最大の役目だ。すべての高校のすべての生徒が、個人と社会のWell-beingの達成を目指し、新しい学習空間で日々新しい学びを行い、新しい時代に必要な資質能力と探究の手法とを身に付け、生涯にわたって学び続けるアクティブラーナーとして育っていくための環境と多様な選択肢を用意することが、教育行政や学校の役割だと考えている。